

高校教育改革の要諦は「世界観」の転換にあり

【プロフィール】

1965年、岐阜県生まれ。広島大学大学院修了後、岐阜県の4高校で教諭として勤務。中学校や博物館にも勤務経験あり。地元では「まちづくり協議会」の立ち上げにも参画し、学校と地域の連携について実践的に研究。中央教育審議会学校地域協働部会専門委員等を歴任後、2017年4月より大正大学地域構想研究所教授。2020年4月より現職。「自分らしく社会に参加できる若者」を育む高校への改革支援を通じた地域創生に尽力中。



大正大学 地域創生学部 教授 ^{うらさき}浦崎 ^{たろう}太郎

1 新課程で育成をめざしている生徒像のリアル

今回の学習指導要領改訂で、いよいよ逃げ切れなくなったことがある。それは、教職員に限らず、私たち大人が自身の世界観をアップデートすることだ。

そんな今、深く味わうべきは「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していく」の深意だ。それは「課題に恋した状態」であると解釈できることから、探究する場所や時間は「学校の授業時間」に閉じることはなく「いつでも、どこでも」になる。「もっと深めたい」という思いから、大学へ総合型選抜で軽やかに進学していく生徒もいるだろう。

実は、年々こうした高校生は増えており、「高校生マイプロジェクト」（以下、マイプロ）の発表会場へ足を運べば、間違いなく出会うことができる。また、そう気づいて、総合的な探究の時間にマイプロを導入した高校も多い。ところが、こうした世界を紹介すると、拒否感や戸惑いを示す高校関係者が少なくなく、次のような反応が返ってくる。例えば、「そんな脇道に逸れていると、勉学に支障が生じる」「自分で動ける生徒ばかりではない」

「それを許したら、遊びはじめる生徒に対して歯止めが利かなくなる」「推薦入試は逃げ道に過ぎず、合格しても遊ぶだけだから、生徒のためにも許してはならない」「生徒を地域に出すと、好ましくない人物の影響を受けて指導が行き届かなくなるので、避けるべきだ」等だ。

注目すべきは、こうした声が激しく噴出して変革が進まない学校と、変革を遂げて沈静化した学校とに分かれ、二極化の傾向さえ見受けられることだ。しかも、同じ県なのに、学校によって極端な差がみられる場合さえある。となれば、生来の態度でないことだけは明らかだ。では、何故こうした現象が発生するのだろうか。そんな問いを起点に原因を“探究”するうちに、冒頭の「世界観」（生徒観・社会観・教育観）という視点を持つに至り、その対比を試みたのが「表1」だ。

2 変革できない学校に染みついている世界観

拒否感や戸惑いの根元は、工業社会の感覚だ。それ

は、言われたことを速く正確にこなすことで企業も個人も社会も豊かになれる実態を背景に、こだわりを封印し、忍耐力を発揮する方が利口とされた社会。学校もその影響を受け、生徒を「教育の対象」と見て、個人の文脈とは遊離した全員一律の指導を行ってきた。

毎日そんな指導を続ければ「生徒は自走性を持たないし、持つてはいけない存在」という見方が嫌でも染みついてしまうし、頑張れる生徒と頑張れない生徒が現れてしまう現実に対しては「生来のもの」という見方にも陥ろう。当然、生徒は逃避したくなるので、誘惑につながりそうな要素は遮断し、学校にとって好都合な方向へ強力に誘導せざるをえない。換言すれば「学ぶ楽しさく誘惑」なので、管理統制が必要になる。また、教師は「生徒に勉強させる」感覚なので、生徒が「授業内・校内」を越えて自ら学ぶ姿は想定できず、自宅学習にも強制力の発動が必要になる。

その感覚を引きずると、探究も「させるもの」扱いとなり、進路も別物になる。となれば、生徒にも教師にも負担がかかり、保護者の理解も得られない。元々「推薦入試等は逃げ道だ」という感覚なので、探究を深めて進路に活かす発想は出てこない。探究は「余分なもの」ゆえ元々最小限に抑制する方向であり、生徒を「円滑な教育活動を阻害する余分な世界」に関わらせたくないことから、地域との連携には後ろ向きになる。そして学校で全てを背負うことになる。

加えて、学校の授業が抑圧的であったならば、生徒の気持ちを学校に繋ぎ止めるために、自分らしさを発揮できる場を学校自身が用意する必要性に迫られるのは不可避。こうした事情から、学校は部活動を手放すことができない。残念ながら、働き方改革は難しく、教師が疲労困憊していくのは避けられない。

こうした在り方は、工業社会が継続していれば許容の余地もあった。しかし、平成の30年間に世界は情報社会に置き換わってしまった。日本の教育もまた、それを前提に再構築する必要に迫られているのだ。

【表1 高校教育改革の必然性を理解するために必要な世界観のアップデート】

これまで(旧課程)	観 点	これから(新課程)
個人は社会に従属すべき存在	個人と社会の関係性	個人は社会を創りだしていく存在
部品としての性能(偏差値・学歴等)の獲得	社会で活躍するための準備	他者とつながって価値を創り出す力の向上
封印して規格化するのが無難 (忍耐と努力が美德)	「自分らしさ」の伸長・発揮	解放して徹底開花するのが生命線 (夢中は努力に勝る)
教育の対象	生徒観	学びの主体
遊離(全員一律)	各生徒の文脈と学習内容	丁寧に有機化(個に応じた学びを創造)
持っていない・持たせてはいけない	生徒の自走性	誰もが可能性を秘めており、ぜひ誘発すべき
本人に帰する何らかの理由がある (格差の顕在化に学校は無力)	人間が自走性や才能を 発揮できるか否かの差	それまでの生涯においてスイッチの入る 機会があったか否かの差にすぎない
特定の価値観へ強みに誘導すべき (不都合な価値観を遮断・封印すべき)	様々な価値観に対する 高校の態度	自走性の偶発的な発現を促すため より多様な価値観・経験を保障すべき
教師が生徒を他者軸(偏差値等)に誘導する	キャリア形成への関わり	各生徒に内在する自分軸を丁寧に引き出す
教師と「水と油」で、校内に活躍の余地なし	キャリアコンサルタント	教師と調和的で、積極活用が合理的
学ぶ楽しさ < 誘惑 (管理統制必要)	学ぶ楽しさ vs 誘惑	学ぶ楽しさ > 誘惑 (管理統制不要)
授業時間内・校内で完結	学び(探究)の機会	放課後・休日も地域・家庭等でも
低い(探究と進路学習を別に用意する必要)	探究と進路学習の有機性	高い(探究→総合型選抜等を普通に想定)
進路実現を阻害するので、得られにくい	探究に対する保護者の理解	進路実現にも有益なので、得られやすい
勉学から逃走する道で、許してはならない	総合型選抜・推薦入試	次なる学びにおいて積極活用するのが適切
生徒を地域に出してはならない (地域連携は余分な業務)	地域に対する高校の態度	生徒を積極的に地域と関わらせるべき (地域との連携・協働は生命線)
学校が一元的に負う	学び(探究)に係る責任体制	学校・保護者・地域団体等が責任を果たしあう
低い	学校運営協議会の必要性	責任範囲の切り分けや相乗効果の発揮に必須
教職員の使命感・世間からの圧力	学校運営・改革のエネルギー源	生徒の自己実現意欲・地域関係者等の共感
低い(教師は疲労困憊)	働き方改革の実現性	高い(教師は笑顔・働きがい)

3 変革を遂げた学校で浸透中の世界観

情報社会では「価値の創造」が重要で、個性を最大限に開花した上で、他者と相乗性や相補性を発揮する在り方が求められる。そして、その社会を生きていく生徒の育成に誠実で、実際に変革を遂げた高校では、世界観の転換も遂げている。それは、こうだ。

生徒を「学びの主体」と捉えて思いを傾聴し、個々の文脈と学習内容とを丁寧に有機化すれば、誰もが学びにむけて自走を始める可能性を秘めている。また、現時点における自走性は、それまでの生涯における経験が反映されているに過ぎないので、スイッチが入る偶発性を高めるべく、より多様な経験を保障できる地域へと体験の場を広げる必要がある。その上で、各々に内在する自分軸を丁寧に引き出せば、それが自走性の源となって、どの生徒も自ら「探究する」。また「学ぶ楽しさ > 誘惑」となることから、授業外や校外でも学びが継続し、管理統制も不要となる。

探究の延長線上に進路を描くのは自然なので、保護者の理解も得られやすく、総合型選抜等を忌避すべき理由もなくなり、探究と進路指導の二重負担も解消される。加えて、課外活動である部活動に依存する必要性も緩和される。

そして、校外の多様な人々と相乗性や相補性を発揮する方が賢明だという実感値に基づき、関係性の深化を進めると、生徒の自走性や成長度、学校に対する共

感も高まる。結果、教師の負担が緩和されるのはもちろん、生徒の成長に喜びを感じる場面も増大。働き方改革が実現する可能性が開け、教師は笑顔になる。

それは架空の話ではない。近年、都市部の大規模な進学校においてさえ、アップデートを遂げた学校も実在するのだ。では、どうすればよいのか。

4 世界観をアップデートする確実なプロセス

それは「今は自走していないが、効果的な後押しをすれば自走できる」域にある生徒を選び、必要最小限の教師と地域関係者等で後押しにむけた作戦会議を持つことだ。伴走後、生徒が成長した姿に接すれば、少しだが「関わり方を変えれば生徒は自走できる」という見方や考え方を持つことができる。その後「次の生徒」を選び、同様のプロセスを履行する。こうして小さなサイクルを意図的にテンポよく回せば、徐々にだが、教師間の理解が深まり、生徒間に憧れや対抗心が芽生え、地域や保護者に共感の輪が広がり、世界観のアップデートは着実に進んでいく。実際、先述の高校でも、こうした手順で転換が進んでいる。

以上、世界の変化に合わせて世界観を転換できた高校では、未来を創る若者が伸びやかに育っている。そしてそれは、世界観の転換なしには絶対に実現できないものと言ってよい。いま高校に必要なのは世界観の転換であることを重ねて強調し、結びとしたい。